

第1回多摩川流域歴史セミナー

『考古学的視点から見た多摩川の歴史』

講演：小田静夫 氏

－開催報告－



『多摩川八景』 多摩川台公園

平成26年11月16日（日）
多摩川流域懇談会

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に則したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

講演『考古学的視点から見た多摩川の歴史』

講演：小田静夫 氏

■考古学と多摩川

考古学とはどういう学問か、みなさんご存知だと思いますが、2000年11月5日に終わったとも言われました。旧石器捏造事件が明らかにされたためです。20年以上前に武蔵野台地の多摩川、野川流域の遺跡をどれだけ発掘しても約3万年前で歴史が止まっていたので、それより前には歴史がないという論文を発表していました。しかし、捏造が明らかにされる前は70万年前の歴史があるとも言われ、私の説は信じられていませんでした。

多摩川には、東京湾から時代ごとに様々な地域の人々が来て、歴史を重ねていることが分かります。大田区の田園調布南遺跡では、貝塚の素晴らしいものが見つかりました。その一部の断面がこの郷土博物館に展示されています。ハマグリやオキシジミ、カキなどが確認されており、目の前が海だったのかも考えられますが、そうではありません。丸木舟で東京湾に行って獲ってきたものだと考えられます。ある場所が海であったかどうかは土壌をボーリングで採取し分析することで明らかにすることができます。土に含まれている藻が海水、淡水のどちらに生育するものかを分析するのです。約6,000年前、現在の世田谷辺りまでは、海水、淡水が混じっていたことが分かります。大田区と品川区にまたがっている大森貝塚は縄文期のもので、日本の考古学研究にとって重要な場所です。久が原遺跡では弥生式の土

器が見つかり、久が原式とも呼ばれます。この2つの歴史上重要な場所があるこの場所で第1回多摩川流域歴史セミナーをやることに価値があると思います。東京湾、多摩川は歴史の出だしのような場所です。今回の講演にあたって、テーマを与えられて調べてみると、多摩川に営まれた歴史を切り口にした参考書はあまりないことが分かりました。岩石や植物、鳥などの自然に関する研究は充実していますが、『東京都の歴史』や全7冊の分厚い『新多摩川誌』を参考とし、今回苦労して資料を作ったということと、多摩川にかかる情熱をこうしてお話したところです。

■人類の起源と移動

人類の誕生に関しては長く「多地域進化説」が信じられてきましたが、近年DNAの解析により、「アフリカ単一起源説」に落ち着きました。様々な地域の原人は途絶えてしまい、残ったアフリカの原人が新人（ホモ・サピエンス）に進化したという考えです。人間は未知なるものに魅かれるのでしょうか。新人は10万年前にアフリカを出ました。北はシベリアに3万年前に到達し南はアフリカと同じ環境にあったとされるスダランド（現在のタイ・インドネシア周辺にあった平野）に約5万年前に到達しました。その後約4～3万年前に日本列島に到達したと考えられています。その後、北からは当時は陸地だったベ



ーリング海峡を1万5,000年前に渡り、1万2,000年前に南アメリカに到達しました。南はオーストラリアのあたりに4万年前に到達しました。



人間は元々泳げなかったため、海を怖がっていましたが、スンダランドの海岸部分に住んでいた人たちが海に出ました。それがラピタ人です。それぞれ、ハワイ、イースター島に1,500年前、ニュージーランドに1,000年前に到達しました。日本列島への渡来は北方コースと南方コースがあるとされています。北はサハリンから北海道を経るコースで、凍っている時期に普段は渡れない津軽海峡を渡ってきたと考えられます。一方で朝鮮半島からの渡来は小さな川があるのみで、渡ってきやすかったと考えられます。

■多摩川流域の遺跡とあらまし

調布市野川遺跡はゴルフ場周辺を発掘したもので、そこでは河川敷の礫が多数発見されました。その石が焼けており、約600℃くらいで熱が加わっていることから、料理に使ったのではないかと考えられます。石蒸し (boiling) の料理法は南の島々の文化であり、南からやってきた人々が住んでいたことを示すと考えられます。

小金井市はけうえ遺跡で発掘された地層は、当初は粘土だとされ「ローム」と呼ばれていましたが、後に火山灰だということが分かり、「関東ローム」や「立川ローム」と名付けられました。立川ローム層

中に旧石器時代の遺物が確認されます。立川ロームより上の黒土は富士山噴火の新しい土です。

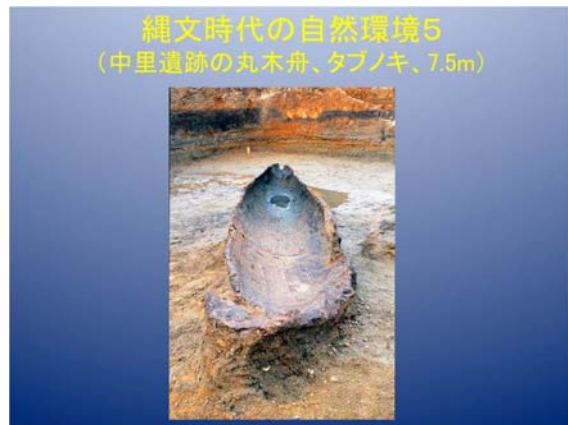
はけうえ遺跡では、3万2,000年前の地層から世界最古の磨製の石斧が発見されました。一般的には旧石器時代に使われていたのは打製石器とされていましたが、それに反する発見でした。ヨーロッパで磨製石器が発見されているのは古くて8,000～1万年前のものです。旧石器時代の磨製石斧は世界でも何か所かで発見されており、オーストラリアでは2万5,000年前のもので全面が磨かれ、取り付けの木のための溝まであるものが見つかりました。日本列島では旧石器時代の磨製石斧が1,000点近く発見されており、これは、世界でも群を抜いて多い数です。



大森貝塚は1877年にエドワード・S・モースが発掘した日本考古学の発祥の地です。モースは考古学が専門ではありませんでしたが、動物学者であったため、発掘したものの分類をきちんとしていました。1984年に東京大学により再発掘された際には、大田区より品川区側に多くの貝塚が残されていました。

北区中里遺跡では波で削られてできる海蝕崖が発見されました。新幹線の予定地では海岸線と流木群がきれいに残っていました。タブノキ製の7.5mの丸木舟も発見されており、飛鳥山の博物館に保存されています。ちなみに縄文時代の丸木舟は全国で80例見つかっており、最大のものは福井県で発見されて

います。



世田谷区岡本前耕地遺跡は砦工業高校の敷地で、そこでは約 5,000 年前の縄文土器が見つかり、文様・形が長野で見ついているものに似ていることから、交流があった証拠だと考えられます。



調布市下布田(しもふだ)遺跡で見つかった約 5000 年前の勝坂式土器の中の土をガスクロマトグラフィーで分析したところ昆布の痕跡が見つっています。また、縄文晩期(約 3,000 年前)の耳飾りは国の重要文化財に指定されています。

野川沿いにある小金井市前原遺跡では、江戸時代の柄鏡の形に似ている住居跡が発掘され、入口と考えられる場所に土器が埋められていました。これは、胎盤を土器にいれて入口に埋め、踏むことで子どもが強くなるという信仰によるものだと考えられます。また、縄文人は蹲踞(そんきょ)といって座って寝ており、1つの住居に4~5人暮らしていたと考えら

れます。ちなみに、千葉県の姥山貝塚では住居内に5名の人骨が発見され、フグの骨が見つかったことからフグ中毒で死亡したと考えられています。

はけうえ遺跡では約1万4,000年前の黒曜石石器製作跡が見つっています。武蔵台遺跡では約3万2,000年前の地層から黒曜石が見つかり、それを京都大学で分析したところ伊豆諸島の神津島のものであることが分かりました。約3万年前に海を渡っていた(世界最古)ということになります。また約5,000年前には神津島産の黒曜石が様々な場所から見つっていることから交易がおこなわれていたと考えられます。



1991年に発掘した港区汐留遺跡では昔の新橋駅の駅舎やホーム跡が見つかりました。伊達家上屋敷跡では井戸の中に瓦などが発見されました。玉川上水の水をとっていたと考えられます。井戸の中には様々なものが投げ込まれており、考古学では宝の山とも言われます。

多摩ニュータウン地域、多摩丘陵は地層ごとに旧石器から現代までの歴史が詰まっており、一つの歴史を語ることができます。

(掲載図版は講演者の作成による)

意見交換会『考古学的視点から見た多摩川の歴史』

コメンテーター：小田静夫氏
コーディネーター：神谷博氏

【参加者】 遺跡の発掘をする上で時代ごとに地層が異なるのは富士山の影響を受けた関東地方の特異な条件か、それとも一般的にどこでも土砂堆積等がある層が積み重なるのか、どちらでしょうか。

【小田】 南関東地方は火山の影響があり、時代ごとにきれいに層が分かれています。これは日本中どこをみてもありません。東北では古い地層が露出しており、北海道では新旧一緒に出てきます。相模野台地では火山灰が15mも積もっており、古い時代に到達するのが困難です。また、関西では花崗岩が二次的な砂になり、マサ土とも言われています。南九州では火山灰が積もりすぎており、始良の火山が噴火した約2万8,000年前の地層（シラス）は100mの厚さで積もりすぎているため、古い地層はとれません。沖縄はサンゴ礁、マージという土壌のためで新旧が一緒になっています。日本列島で立川段丘、武蔵野台地、野川流域の地形が一番きれいに地層がとれるのです。野川遺跡では1つの時代（旧石器）で10枚の地層がとれます。適度な火山灰が適度な厚さ、3mくらい積み重なっています。世界的にはイタリアのポンペイの辺りが同じような環境にあるのですが、先史時代に人があまり住んでいませんでした。

【神谷】 これまで野川で活動してきて、野川遺跡のお話を伺って野川ってそんなにすごいのかなと認識を新たにしていたのですが、今のお話を伺って、ますますよく分かりました。

【小田】 野川で分かったことを調べると10万年前アフリカを出発したホモ・サピエンスが北からと南からそれぞれ通ってやってきて、ちょうど3万年前にぶつかる、出会うのが多摩川、野川のところなのです。

【参加者】 太古の昔の人類は多摩川のような河川を

利用していた事実はあるのでしょうか。利用していたとしたらどのようなことだったのでしょうか。

【小田】 多摩川は急流で川の中は利用しにくかったと考えられます。しかし、上流の岩石の種類が多く、特にチャートは矢尻として優れていたため、石器を作っていました。五日市の遺跡で痕跡が見つっています。中流の砂岩は打製石斧の良い材料であり鋏として使っていました。深大寺の青渭神社の裏には打製石器がたくさん見つかる石塚があったといわれており、その様子が『地底探検記』という本に書かれています。縄文時代は植物の採集による食料が多かったため、周辺で植物はとっていたと思いますが水流も多かった多摩川では魚はあまりとっていなかったと考えられます。

【参加者】 太古の昔は、多摩川の周りにはあまり近づかず、人々は高いところにだけ住んでいたのでしょうか。

【小田】 そのように考えられており発掘自体がされていませんでしたが、最近低湿地から遺跡が出てくるようになり、府中の低地では最古の弥生時代の遺跡が見つかりました。農耕の跡も見つかっています。弥生文化が関東に入ってくるのは中期で、天竜川より北には行きませんでした。関東より北は縄文晩期が長く続き、弥生人を迎え撃ちました。調布の縄文人はチャートで矢尻をつくり、弥生人は青銅器で弓矢をつくり、戦争をしました。弥生人は海を利用し、一部は山地を利用して到達しました。府中に来たルートを解析すると面白いと思います。

【参加者】 「黒潮圏の考古学」は出版物でしょうか。拝読したいです。

【小田】 出版しています。他には青春出版社から



「遙かなる海上の道—日本人の源流を探る黒潮文化の考古学」という本も出しています。

【参加者】 考古学では気象、海流の痕跡のようなものは分かるのでしょうか。

【小田】 考古学的資料では分かりません。民俗学的には種族の伝説や移動から、この海流でしか移動できないといった理由で判断します。

【神谷】 4番目の到達ルート、伊豆諸島や小笠原を通るルートについてお教えいただければと思います。

【小田】 小笠原は本来は無人島です。英語で小笠原のことをボニンアイランドと言いますが、これを日本語に直すと無人島という意味です。最初に小笠原に移住したのはハワイ人でした。幕府が幕末に小笠原を探検し、幕府の支配下にする調定を結びましたが、利用できなくなり再び欧米人が住むようになりました。ペリーが捕鯨基地にするために小笠原や沖縄を狙っていましたが、うまくいきませんでした。沖縄はアジアにとってコーナーストーンです。小笠原は歴史を調べると、列強が群がった場所であることが分かります。小笠原を最初に発見したのは紀州の商人です。伊豆諸島は北と南で文化が違います。ちょうど三宅島のあたりに黒潮本流が通っており、それを境に文化が異なります。黒潮の北側にある新島、南側の八丈島は流人を送る場所となっていました。気候も異なり、カヌーやスイショウという種類のエビネの分布も黒潮を境に分かれます。最近話題の赤サンゴもきっと、黒潮を境に分布が分かれるでしょう。

【参加者】 世田谷区が1990年頃カムバックサーモン運動を行うに当たり、縄文期のサケの頭部の骨が発見されたとの報告に際し、魚類学者からサケではなくサクラマスではとの意見が出されました。あき

る野市前田耕地遺跡の出土骨はサケと確認されたのでしょうか。

【小田】 サケとマスの違いは海に出るか河川で過ごすかで区別するだけで、学名は同じだという説があると聞きます。縄文文化ではサケの骨は食べてしまうため多くは残りません。秋川の前田耕地遺跡では骨が多く見つかったため、サケの通り道だということが定説とされています。縄文時代の草創期の1万2000年前ごろで、ちょうど暖かくなりサケの遡上が激しくなった時期とされています。北海道の豊平川ではサケを戻そうという活動を北大の吉崎昌一氏がやっていました。

【参加者】 群馬の生品村というところにいたことがあります。あのあたりの田んぼはどちらから来たものなのでしょうか。

【小田】 群馬の田んぼについては詳しくは知りませんが、弥生時代に多くの田んぼがつくられました。田植えをしているもので、火山灰の土なので水が抜けてしまうため、床を作っており、おそらくそれは古墳時代から続いていると思います。南関東からの道で来たものだと考えられます。群馬の太田の古墳群は埴輪で有名です。イサム・ノグチが埴輪を世界に紹介しました。その周辺は粘土の産地となっています。

小田 静夫 氏 プロフィール



1942 年 東京生まれ

1972 年より東京都教育庁文化課勤務

この間、都内の遺跡調査、伊豆・小笠原諸島、琉球列島など、
数々の「旧石器遺跡」の発掘調査を手がける

2003 年 退職

2005 年 岩宿文化賞受賞

2009 年 伊波普猷賞受賞

総会司会：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会専門運営委員会（歴史部会）委員長）



今後、多摩川を下流から中流、上流へとさかのぼって、流域の博物館で先史・古代から中世・近代、近現代と歴史セミナーを開催していく予定です。一回りして総まとめの歴史シンポジウムが開催できたら多摩川の歴史がまとまった一冊の本になるかもしれませんね。そのようにこれからも続けていきたいと思っています。

開会挨拶：中村 文明 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）



多摩川流域懇談会は、住民と国土交通省、流域自治体が協働で多摩川のいい川づくりを行っていくための組織です。住民と多摩川との関係を良くしていこうと活動しています。多摩川は全国に誇れる川づくりを行っていることを申し添えておきます。

館内紹介：岡本 慎一 氏（大田区立郷土博物館館長）



大田区立郷土博物館は、彫刻家佐藤朝山氏の住居跡に昭和 54 年 11 月 3 日に開館し、今年で 34 周年を迎えました。館内には 2 万 5 千点の所蔵品があり、5 年前にはリニューアルいたしました。考古、水関連、民族、産業、空港等に関する展示物があり、常設展や企画展、体験学習会や親子を対象としたイベントも実施しています。大田区には多摩川台公園の古墳展示室や鵜の木一丁目横穴墓群、六郷水門、丸子の渡し跡、旧レンガ堤などの歴史的な見どころがあります。

閉会挨拶：船橋 昇治 氏（国土交通省京浜河川事務所長）



タイムスリップしたように目の前に当時の景色が浮かんできました。今、多摩川の周りは都市化が進み、全く違う状況ですが、お話を伺いながら、こういった長い歴史の中で変化してきたのだと考えた次第です。今回、多摩川流域歴史セミナー第 1 回ということで開催いたしました。いろいろな流域の歴史を刻んでいく多摩川について、過去を知り、本質を捉えながら、次の世代へつないでいくことが重要だと感じました。本日はありがとうございました。

各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。



表面 各回の歴史セミナー概要を掲載



裏面 会場となる博物館情報を掲載

第1回多摩川流域歴史セミナー『考古学的視点から見た多摩川の歴史』開催報告

作成 多摩川流域懇談会



■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL : <http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin00542.html>

